ま・ち・か・どズームIN!

みなさんからのすてきな情報を待ってます!

多彩な催しでしろいしの夏を満喫

2003白石夏まつり

恒例の白石夏まつりが８月11日から20日にかけて開催され、白石音頭パレードをはじめ、流しうーめんやはしご乗り、花火大会など、多彩な催しで白石の夏を盛り上げました。

◀流しうーめん（ポーチパーク）

◀▲白石音頭パレード
各団体の趣向を凝らした衣装や踊りに観客も大満足でした

▲白石和紙あかり展示会（壽丸屋敷）

治せばまだまだ使えるよ!

おもちゃの病院開院

７月26日と29日の両日、いきいきプラザに今年も「おもちゃの病院」が開院しました。

白石工業高等学校の機械部員と先生、ボランティアの方たちがお医者さん。会場には、電池やゼンマイで動くラジコンカーや人形などが次々と運び込まれ、名医の皆さんが「カルテ」を見て悪いところを発見し、配線や接触の不具合など、さまざまな「病気」を「治療」しました。

「大切に使ってね」と「健康」になったおもちゃを受けとった子どもたちは大喜びでした。

夏の交通事故防止

みやぎ・ふくしま県境作戦

県境を接し合う、白石警察署管内と福島県桑折警察署管内の交通安全協会関係者や甲冑工房「片倉塾」の皆さんら約120名が、７月18日、福島県国見町の国道４号国見パーキング内で、夏の交通事故防止合同キャンペーンを実施しました。

参加者たちは、「県境を越え、すみずみまで事故防止」、「ベルトと気持ちをピーチッとしめて」と、特産品とのごろ合わせで七ヶ宿の「白炭」と桑折の「桃」を通行車両に配り、事故防止を呼びかけました。

手づくり絵本に想いを込めて

手づくり絵本講習会

７月25日と８月１日の２日間、図書館で鈴木智恵子さんを講師に手づくり絵本講習会が開かれました。

講習には小学生を中心に22名が参加。楽しい冒険物語をはじめ、料理や折り紙の作り方など、自分たちで考えた内容の絵本を、表紙や中身、製本まで、すべて手作りで作り上げました。

この世界に一冊しかないオリジナル絵本は、11月に図書館で開かれる「手づくり絵本展示会」に展示されますので、ぜひご覧ください。

プロの大工さんと木工製作

親子木工教室

小学生たちに夏休みの思い出をと、白石市建設職組合青年部が企画して、８月10日、中央公民館で恒例の親子木工教室が開催されました。

教室には、約70組の親子が参加。巣箱や本棚、日本郵政公社の貯金箱コンクール作品などを、プロの大工さんにお手伝いしてもらいながら、親子で楽しく製作しました。

台風一過の青空が広がった会場の外では、かき氷やスイカも振る舞われるなど、参加者たちは夏休みの１日を満喫していました。

パソコンやデジカメに親しみました

アテネまつり開催

情報センター「アテネ」がオープンして５周年を記念して、７月18日から20日までの３日間、「アテネまつり」が開催されました。

デジタルカメラで撮影した写真をパソコンに取り込んで印刷するコーナーや、お絵かきソフトを使って絵入りカレンダーを作るコーナー、パソコン何でも相談コーナーが設けられ、夏休みに入ったばかりの子どもたちから大人まで、大勢の市民が訪れ、パソコンやデジタルカメラに親しみました。

近い将来の宮城沖大地震に備えて

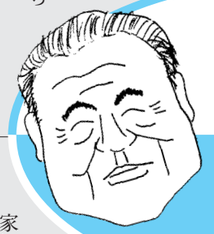
職員の初動体制・通信訓練を実施

三陸南地震の際、被害状況の把握や関係機関との連絡のための通信手段の確保が課題となった教訓から、市では職員の震度別初動体制を確立し、阪神淡路大震災でも活用実績のある携帯型の移動無線機11台を新たに導入しました。

７月22日の夜、震度４の地震が発生したとの想定で、初動体制・通信訓練が行われ、所定の職員が地区公民館などの防災拠点に参集し、市庁舎本部に被害や職員の参集状況を報告しました。

川井市長の せせらぎトーク

「恋女房」



白石市助役故髙橋新太郎氏の功績は、葬儀の栞にあった、「市長の女房役として、川井市政を支えた最大の業績は、約四十一年（助役の任期を含めると約五十五年）に亘り職員として培った、ノウハウと手腕、進取の気概を遺憾無く発揮して、市財政の健全性維持に向け陣頭指揮を執られたことに代表されます。川井市政十九年の各事業は、髙橋助役がいなければ健全財政を保ちながら実施することは、まず不可能であったろう…との、川井市長の一言に言い尽くされるものと考えられます。」に尽きると思う。

弔辞を読みながら、「もう、あんなに一生懸命働かなくてもいいですよ。もう、私をかばって悪口を言われる必要もありませんよ。一緒にスタートした時、何一つ無いと言われた白石市がまちづくりで、世界的な賞を受けるまでになったじゃありませんか。今、心から申します。『助役ありがとう』と。」の最後で、涙で目がかすみ、嗚咽で声が出なくなってしまった。

何年ぶりであろうか。昭和四十三年、私は母を失った。何回も入退院を繰り返す壮絶な病との苦闘の末の、苦しみながらの死であった。最期を看取って、遺体と共に我が家に帰った時、祖母に「苦しまなかったかい」と聞かれ、これまでの母の苦しみが頭に浮かび、思わず号泣した。気性の激しかった祖母に「しっかりしなさい。男は、泣くものではない」と、叱りつけられて以来、私は人前で涙を見せたことは無い。

助役が四月の初めに検査で入院した時、会議で病院に出かけた私は、院長に呼び止められた。「市の重要な地位に就かれている方なので、敢えて申します。助役は肝臓がんです。おそらく今年の夏を越すのは難しいでしょう。」しかし、奇跡的に回復し、六月の議会を無事乗り切ってくれた。六月二十三日、再入院。何べんか本人から「お役に立てなくて申し訳ない」と辞職の申し入れがあったが、私は握りつぶした。夏を越すのが難しければ、現職のまま死なせてやりたかった。

かつてスパルタの母は、我が子を、「勝利か、しからずんば楯に乗せられて帰れ」と、戦場に送り出したと言われるが、彼は楯に乗せられて私たちの胸に戻って来た。私への不満や、悪評を全てひっかぶり、自らを犠牲にして燃焼し尽くした、故髙橋新太郎助役に満腔の敬意と感謝を捧げたい。

七月二十九日、荼毘に付される日、霊柩車は市役所を一周して、火葬場に向かった。多数の職員の見送りにこたえる警笛の音が、いつまでも尾を引いていた。

告別の　警笛長く　梅雨明けず

三十一日午前十一時頃、葬儀の時間を待ってぽつねんと室にいた私に、秘書が声を掛けてくれた。「市長淋しそうですね。お察しします。私はお仕えしてわずか三ヶ月、今でも助役室から声を掛けてくれるような気がするんです。なのに、市長は十五年ですものね」

市長室を出る時のぞいた主無き助役室に、一輪の白菊が香っていた。

恋女房　逝きて机に　菊一輪